

速報版

Benesse® 教育研究開発センター

第3回

幼児の生活アンケート

乳幼児をもつ保護者を対象に

国内調査

10年前と比べて、
幼児の生活や
保護者の意識は
どのように変わ
っているだろうか

この速報版には、乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態を把握するうえで役立つデータがたくさん詰まっています。子どもたちがよりよく成長するために私たち大人は何をすればよいのか、一緒に考えてみませんか。

私たちは、次の点に関心をもち、乳幼児をもつ保護者を対象に調査を行いました。

- 基本的な生活時間などの、幼児の生活の様子はどのように変化しているのか。
- 母子関係をはじめとする家族とのかわりは、どのように変化しているのか。
- 母親は自分の仕事や子どもの教育に対してどのような考えをもっているのか。
- 父親は家事や育児にどのくらい参加しているのか。母親はその状況に満足しているのか。

今回の調査は、首都圏の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者（主に母親）約3,000名にご協力いただきました。この調査とほぼ同じ内容の調査を1995年、2000年にも実施しており、10年間の変化を把握できるのが大きな特徴です。このように大規模で、かつ経年での比較ができる調査は他ではほとんど実施されていないので、日本の乳幼児の生活全体を概観できるきわめて貴重な資料といえます。



調査概要

●調査テーマ

乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態

●調査方法

郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

●調査期間

第1回調査 1995年2月
第2回調査 2000年2月
第3回調査 2005年3月

●調査対象

第1回調査（1995年調査）
首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者1,692名（配布数3,020通、回収率56.0%）

第2回調査（2000年調査）
首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）、および地方都市（富山市、大分市）の1歳6

か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者3,270名（配布数5,600通、回収率58.4%）

*経年での比較を行うために、地方都市の回答を分析から除外している。

第3回調査（2005年調査）

首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980名（配布数7,200通、回収率41.4%）

*経年での比較を行う際は、0歳6か月～1歳5か月の乳幼児をもつ保護者の回答を分析から除外している。

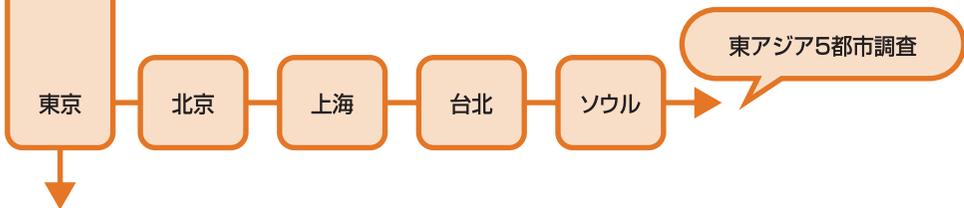
●調査項目

子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとのかかわり／遊び／母親の教育観・仕事観・子育て観／子どもの将来への期待／今、子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／父親の家事・育児参加／子育て支援など

*調査項目は経年比較が可能なように配慮したが、時代の変化に合わせて、追加・削除などの変更を行っている。

分析枠組みとサンプル構成

経年調査	調査	サンプル数	性別	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	男女別合計
第1回	1995年調査	1,692	男子	—	57	226	154	182	110	90	819
			女子	—	71	233	152	206	108	103	873
第2回	2000年調査	1,601	男子	—	91	246	123	128	125	130	843
			女子	—	84	235	128	98	105	108	758
第3回	2005年調査	2,980	男子	161	334	374	164	162	152	143	1,490
			女子	165	326	366	176	150	174	133	1,490



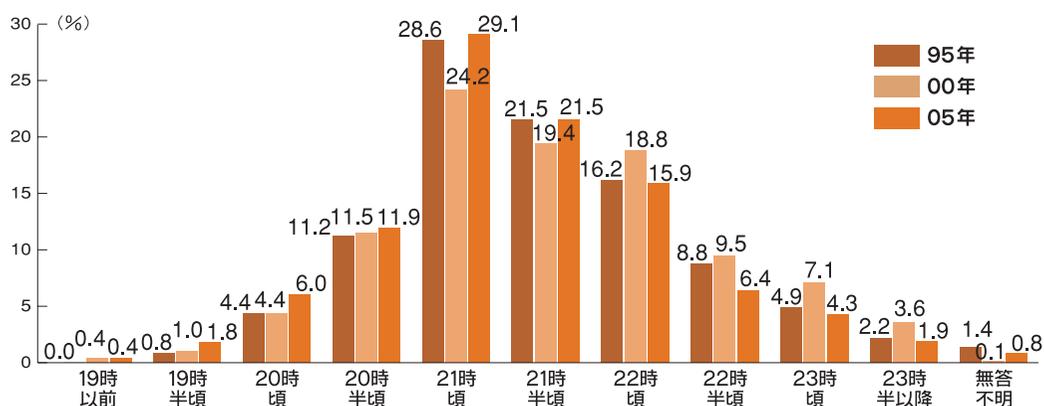
- ◆表中、95年調査、00年調査の1歳児は、1歳6か月～1歳11か月を、また、05年調査の0歳児は0歳6か月～0歳11か月を示す。
- ◆データの精度を高め、経年での比較を可能にするため、比推定を用い、調査対象の属性別構成比を現実にあわせた。比推定で用いるウェイトは、子どもの男女別（2区分）×子どもの年齢別（6区分）の12区分に分割して、4都県の人口推計に基づいて作成した。
- ※東アジア5都市における調査については、「幼児の生活アンケート・東アジア調査」（仮）速報版（2006年1月刊行予定）にて報告。
- ※国内調査全体についての詳細な分析は、『第3回幼児の生活アンケート報告書・国内調査』（仮）（2005年12月刊行予定）にて報告。

1 夜型化の進行がとまり、早起きになっている

5年前（00年調査）は、「22時頃」以降に就寝する割合が4割弱と、幼児の生活の夜型化が進む実態が明らかになったが、今回（05年調査）は3割弱に減少して10年前（95年調査）と同じ水準に戻った。5年前と比較すると、起床時刻も早まっていて、幼児が早寝早起きになっている。

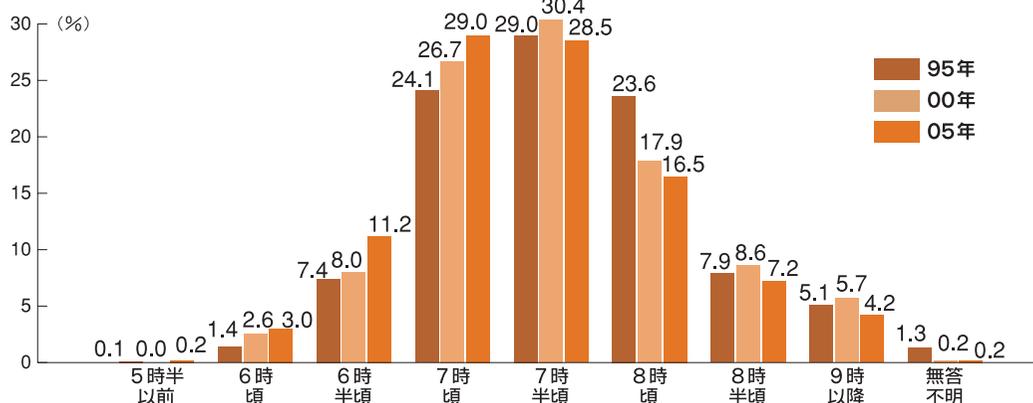
Q 平日夜、何時頃に寝ますか。

図1-1-1 平日の就寝時刻（10年比較）



Q 平日、何時頃に起きますか。

図1-1-2 平日の起床時刻（10年比較）



「22時頃」以降に就寝する比率をみると、95年32.1%→00年39.0%→05年28.5%となっており、5年前から10.5ポイント減少した。00年には、幼児の夜型化が話題となったが、今回はその進行がとまっている（図1-1-1）。

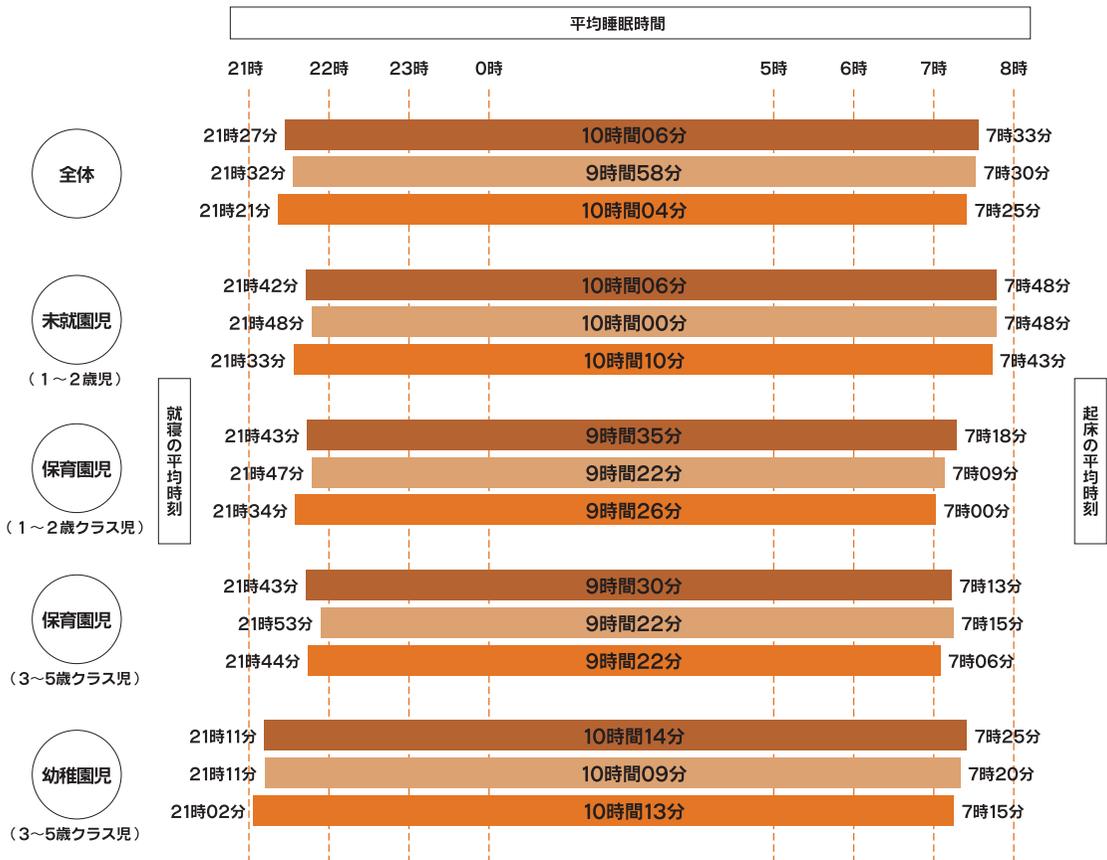
同時に、起床時刻も早まっている。「7時頃」以前に起床する比率をみると、95年33.0%→00年37.3%→05年43.4%と変化している（図1-1-2）。全体的に、幼児の生活が早寝早起きになっている。

2 年齢や就園状況によって睡眠パターンが異なる

未就園児は、睡眠時間は長いが、就寝時刻も起床時刻も遅めの生活を送っている。幼稚園児は就寝時刻がもっとも早く、相対的にみて規則正しい生活を送っている様子がうかがえる。これに対して、保育園児は就寝時刻が遅いうえに早起きで、睡眠時間が短めである。

Q 平日夜、何時頃に寝ますか。／平日、何時頃に起きますか。

図1-2-1 就寝・起床の平均時刻と平均睡眠時間（全体・子どもの年齢別・就園状況別 10年比較）



※調査時点における子どもの年齢、就園状況は以下の通りである。
 未就園児(1~2歳児):1歳6か月~3歳10か月の幼稚園・保育園に通っていない幼児
 保育園児(1~2歳クラス児):1歳6か月~3歳10か月の保育園に通っている幼児
 保育園児(3~5歳クラス児):3歳11か月~6歳11か月の保育園に通っている幼児
 幼稚園児(3~5歳クラス児):3歳11か月~6歳11か月の幼稚園に通っている幼児

■ 95年
 ■ 00年
 ■ 05年

※就寝と起床の平均時刻は、「21時頃」を21時、「23時半以降」を23時30分のように置き換えて算出した。また、平均睡眠時間は、就寝時刻と起床時刻から算出した。

睡眠時間の平均をみると、10時間06分（95年）→9時間58分（00年）→10時間04分（05年）と推移している。5年前は減少する傾向がみられたが、今回は10年前とほぼ同じ程度に戻った。起床・就寝時刻や睡眠時間などのパターンは、年齢や就園状況によって異なる。未就園児（1~2歳児）の睡眠時間は比較的長い、遅く寝

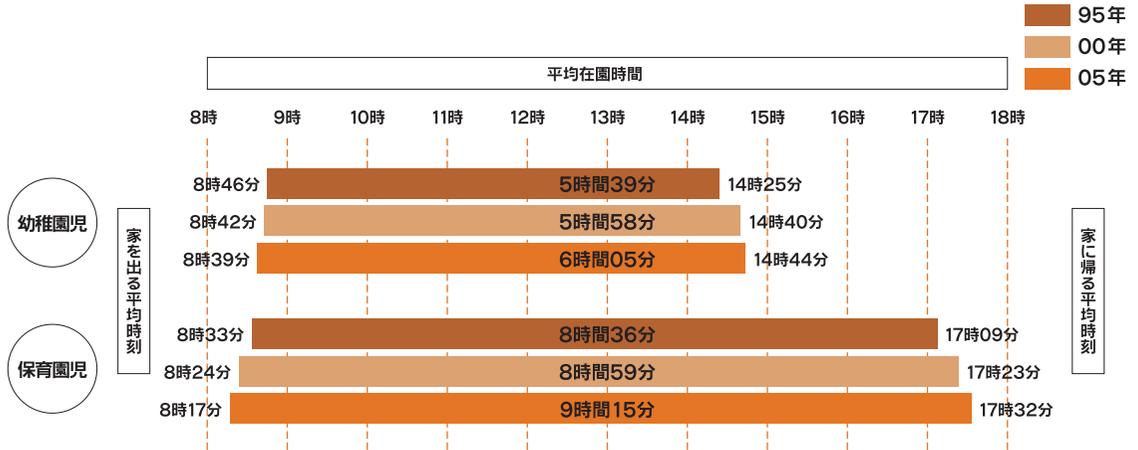
て、遅く起きる生活を送っている。幼稚園児（3~5歳クラス児）は、この10年間で早寝早起きの傾向が強まり、10時間以上の睡眠をとっている。一方、保育園児は在園時の昼寝の時間が影響しているためか、1~2歳クラス児、3~5歳クラス児ともに、就寝時刻が遅く、睡眠時間が9時間台と短くなっている。

3 幼稚園児も保育園児も園にいる時間が長くなっている

この10年間の推移をみると幼稚園児、保育園児ともに家を出る時刻は早まり、帰宅時刻は遅くなっている。そのため、在園時間が長くなっている。幼稚園・保育園への要望を5年前と比較すると、「保育の時間を長くしてほしい」と思う母親が、幼稚園では増えているのに対して、保育園では少なくなっている。

Q 幼稚園・保育園に行くために何時頃、家を出ますか。／何時頃、帰宅しますか。

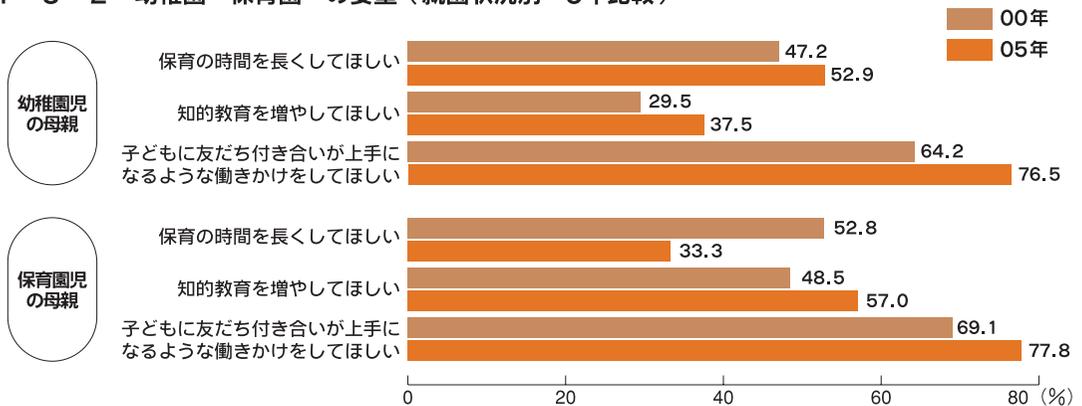
図1-3-1 家を出る・家に帰る平均時刻と平均在園時間（就園状況別 10年比較）



※95年調査は「18時以降」を18時30分、00年・05年調査は「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。また、平均在園時間は、家を出る時刻と家に帰る時刻から算出したため、通園時間を含む。

Q 現在通っている幼稚園・保育園について、あなたは次のようなことをどう思いますか。

図1-3-2 幼稚園・保育園への要望（就園状況別 5年比較）



※「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
※母親の回答のみ分析。

通園時間を含めた在園時間の平均をみると、幼稚園児は5時間39分から6時間05分と26分増加し、保育園児は8時間36分から9時間15分と39分増加しており、園で過ごす時間が長くなっている（図1-3-1）。とくに保育園児については、95年から00年にかけて23分、00年か

ら05年にかけて16分も園にいる時間が長くなっている。こうした園の対応を反映して、保育園では、「保育の時間を長くしてほしい」（とてもそう思う+まあそう思う）という母親の要望が00年より19.5ポイントも下がっている（図1-3-2）。

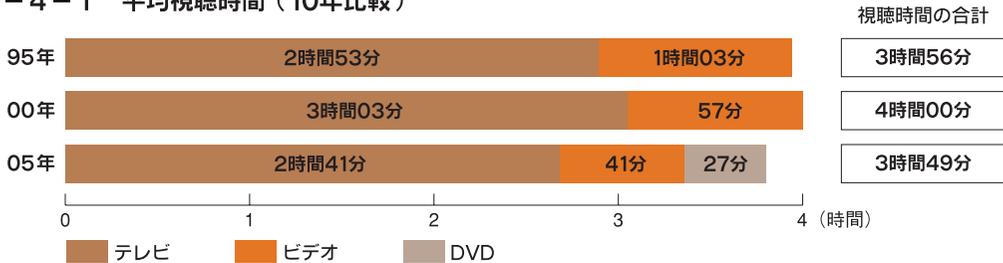
4

テレビ視聴やテレビゲームで遊ぶことが減少傾向にある

テレビ、ビデオ、DVDを視聴する時間の合計は、この10年間でわずかに減った。よくする遊びについて聞いたところ、テレビゲームも減っていた。テレビの視聴の仕方については、親子で一緒に楽しむ様子がうかがえる。

Q お子様は1日あたり何時間くらいテレビ／ビデオ／DVDを見ていますか。

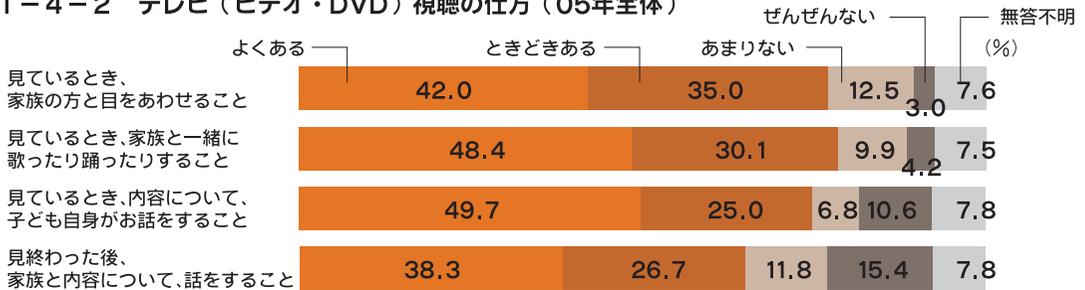
図1-4-1 平均視聴時間（10年比較）



※「テレビ」「ビデオ」「DVD」を使う頻度に関する設問で「ごくたまに見ている」「ぜんぜんさわらない・使わない」「使わせない・見せない」「家にない」と回答した場合は、「0時間」として平均視聴時間を算出した。

Q お子様はテレビやビデオ（DVD）をどのように見ていますか。

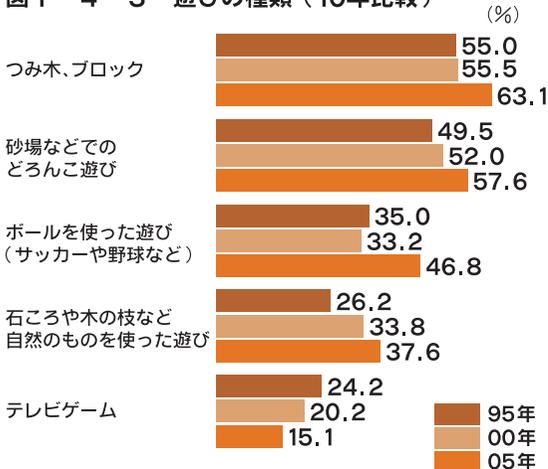
図1-4-2 テレビ（ビデオ・DVD）視聴の仕方（05年全体）



※テレビ、ビデオ、DVDをいずれか1つでも見ている人のみ分析。
※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ保護者の回答を含む。

Q お子様はどのような遊びをよくしていますか。

図1-4-3 遊びの種類（10年比較）



メディアの平均視聴時間の変化をみると、この10年でテレビ視聴は12分、ビデオ視聴は22分減少した。しかし、今回から新たに設けたDVD視聴に、27分費やしており、総合するとわずかな減少という結果になっている（図1-4-1）。次に、視聴の仕方についてたずねたところ、「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」78.5%（よくある＋ときどきある）、「見終わった後、家族と内容について、話をすること」65.0%など、多くの家庭で親子が一緒に楽しんでいる様子がうかがえる（図1-4-2）。遊びについて聞いた項目では、自然に触れたり、頭や身体を使ったりする遊びが増加する一方で、「テレビゲーム」が減少している（図1-4-3）。電子メディアとの接触を含めて多くの保護者が放任にならない配慮をしているようである。

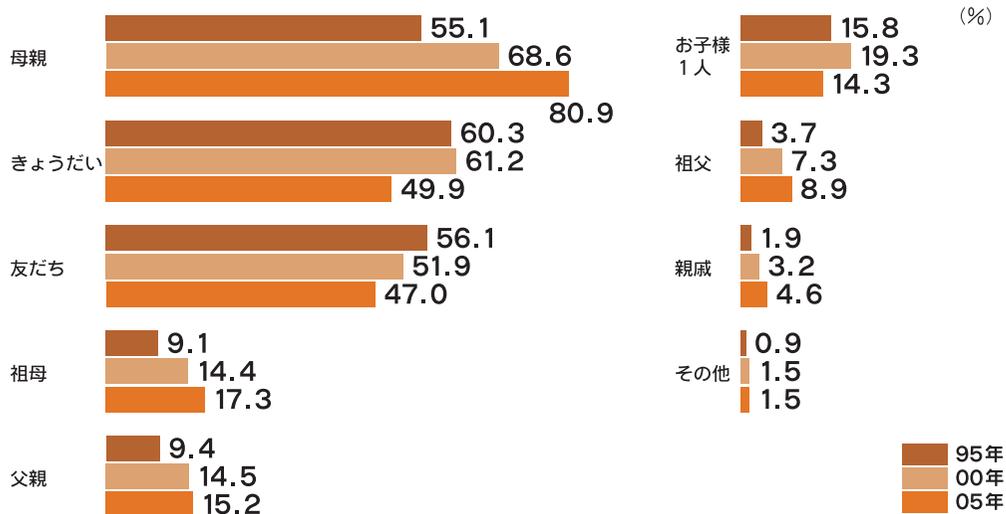
※複数回答、「その他」を含む16項目の中から選択。16項目中5項目を図示。

5 母子が一緒に活動することが増えている

平日に子どもと一緒に遊ぶ人について、「母親」を選択する比率は95年調査では55.1%で、「きょうだい」「友だち」に続いて第3位であったが、05年調査では80.9%と大幅に増加して第1位になった。「テレビ」「CD」を一緒に使う人についても、「母親」の比率が高まっている。

Q 平日、(幼稚園・保育園以外で)遊ぶ時は誰と一緒にいることが多いですか。

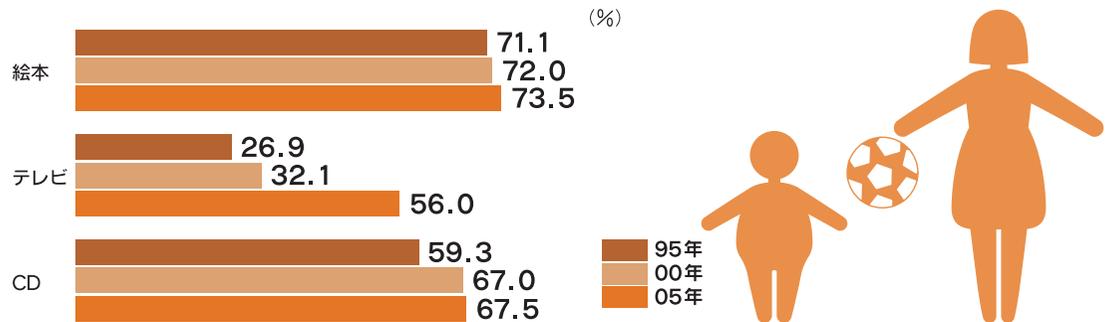
図1-5-1 一緒に遊ぶ人(10年比較)



※複数回答、「その他」を含む9項目の中から選択。

Q お子様が必要なものをを使う時、おもに誰と一緒に使いますか。

図1-5-2 母親と一緒に使うもの(10年比較)



※「母親」「父親」「祖母」「祖父」「きょうだい」「友だち」「お子様1人」「その他」「家がない」から1つ選択で、「母親」を選択した%。

※「家がない」および無答不明を除いて算出した。

※11項目中3項目を図示。

幼稚園や保育園以外で子どもと一緒に遊ぶ人についてたずねたところ、「きょうだい」「友だち」が10年間で10.0ポイント程度減少しているのに対し、「母親」が25.8ポイント増加して80.9%となった(図1-5-1)。さらに、さまざまなメディアの利用についておもに誰と一

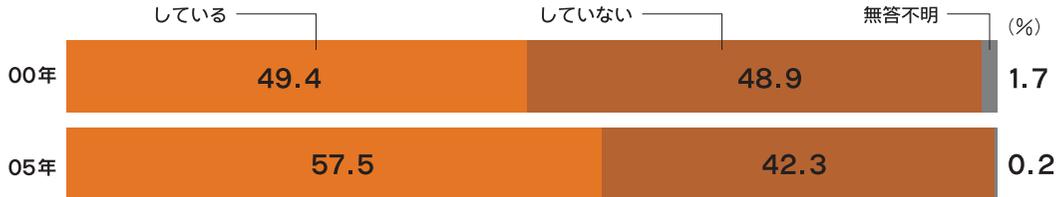
緒に使うかを聞いた項目でも同様の傾向が表れている。「絵本」はもともと母親と一緒に使うことが多かったが、「テレビ」「CD」でも大幅に「母親」の比率が高まっており、全体的に母子が一緒に活動する機会が増えている様子がわかる(図1-5-2)。

6 習い事の開始が低年齢化している

習い事をする比率は、00年調査に比べて全体で8.1ポイント増加した。年齢ごとでは、2歳児の伸びが大きく、10.5ポイント増えている。また、3歳児で過半数に達しており、スタートが低年齢化していることがわかる。習い事の種別をみると、「英会話などの語学の教室」の増加が著しい。

Q 現在、お子様は習い事・おけいご事（通信教育を含む）をしていますか。

図1-6-1 習い事をしている割合（5年比較）



Q お子様は現在、どのような習い事・おけいご事をしていますか。

図1-6-2 習い事をしている割合（子どもの年齢別 5年比較）

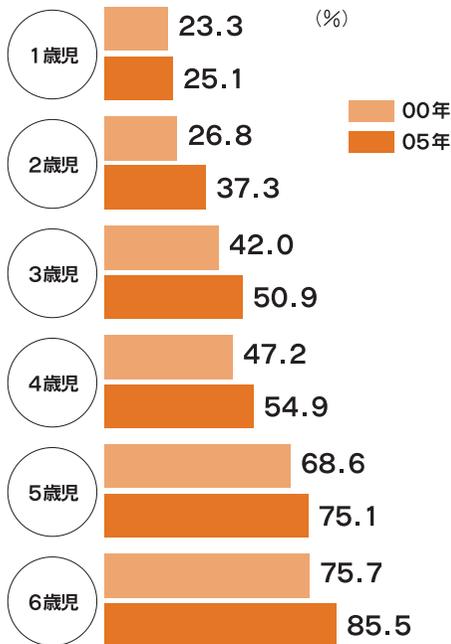
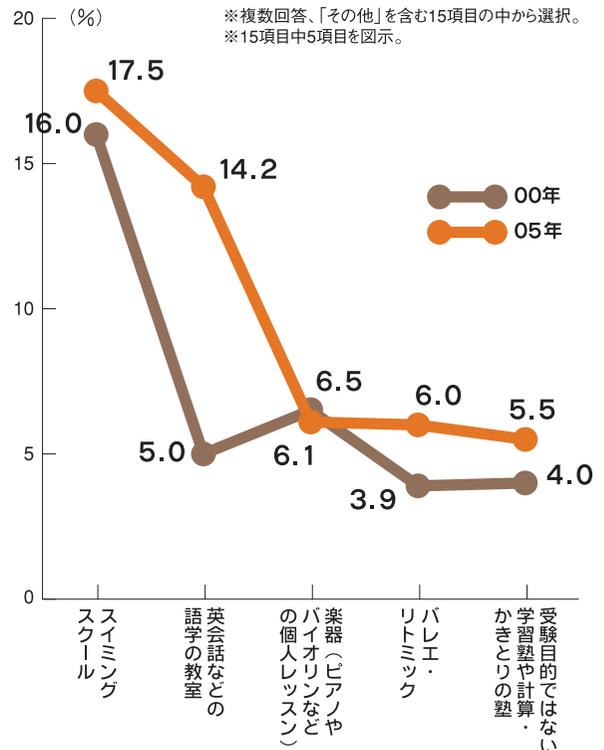


図1-6-3 習い事の種別（5年比較）



何らかの習い事に通ったり通信教育などを行っていたりする比率は、00年では49.4%であったが、05年では57.5%となり、8.1ポイント増加している（図1-6-1）。また、これを年齢別でみたところ、いずれの年齢でも比率が高まっており、習い事が盛んになっている様子が見えがえる。とくに、2歳児では26.8%から

37.3%と、この5年で10.5ポイントも増えており、習い事の開始が低年齢化する傾向もみとれる（図1-6-2）。習い事の種別で経年変化をみたところ、「英会話などの語学の教室」が5.0%から14.2%と大幅に増加しており（図1-6-3）、5歳児や6歳児では2割を超えている（図省略）。

7 一度落ち込んだ教育費の支出がこの5年で増加している

教育費に10,000円以上支出している比率をみると、95年調査では31.1%と3割を超えていたが、00年調査では24.7%に落ち込んでいた。しかし、05年調査では31.1%に回復しており、10年前の水準に戻っている。

Q お子様の1人あたりの教育費(1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用)を教えてください。

図1-7-1 1人あたりの教育費(10年比較)

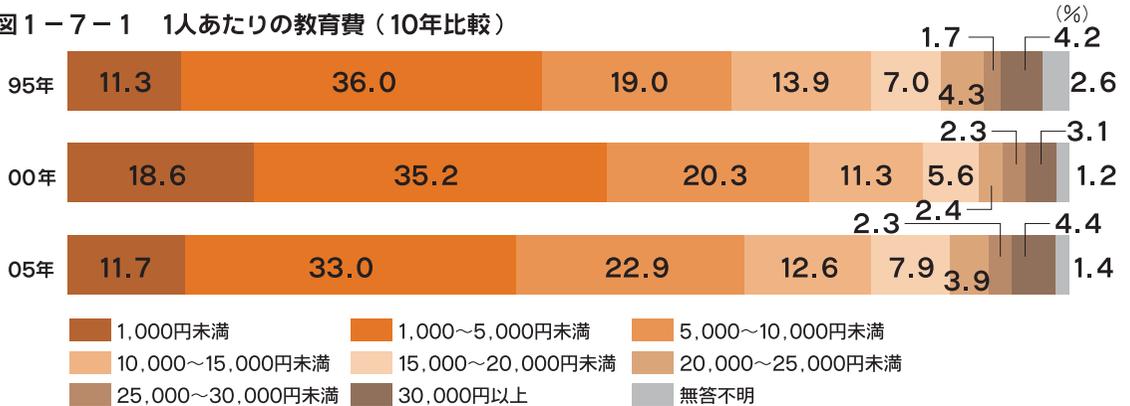
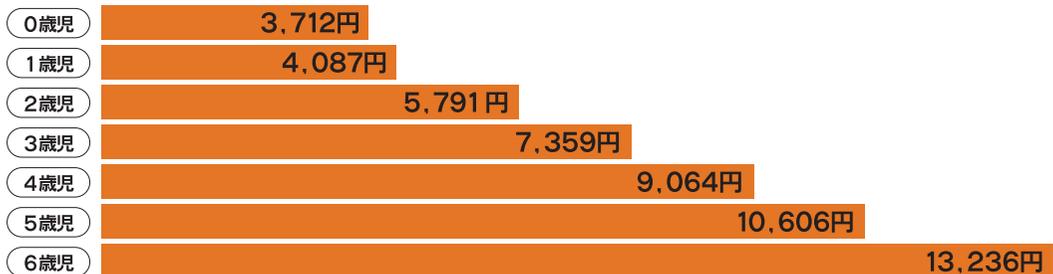


図1-7-2 1人あたりの平均教育費(子どもの性別 05年全体)



※0歳6か月~1歳5か月までの乳幼児をもつ保護者の回答を含む。
 ※1人あたりの平均教育費は「1,000円未満」を500円、「1,000円~5,000円」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。

図1-7-3 1人あたりの平均教育費(子どもの年齢別 05年全体)



※0歳6か月~1歳5か月までの乳幼児をもつ保護者の回答を含む。
 ※1人あたりの平均教育費は「1,000円未満」を500円、「1,000円~5,000円」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。

00年は景気の影響を受けたためか、95年と比べて教育費を抑える傾向がみられたが、05年は10年前と同じ水準に戻っている(図1-7-1)。子どもの性別でみると、保護者は男子よりも女

子に多くの教育費をかけている(図1-7-2)。また、子どもの年齢が上がるにつれ、教育費は高額になっていく傾向がみられる(図1-7-3)。

2 母親の意識

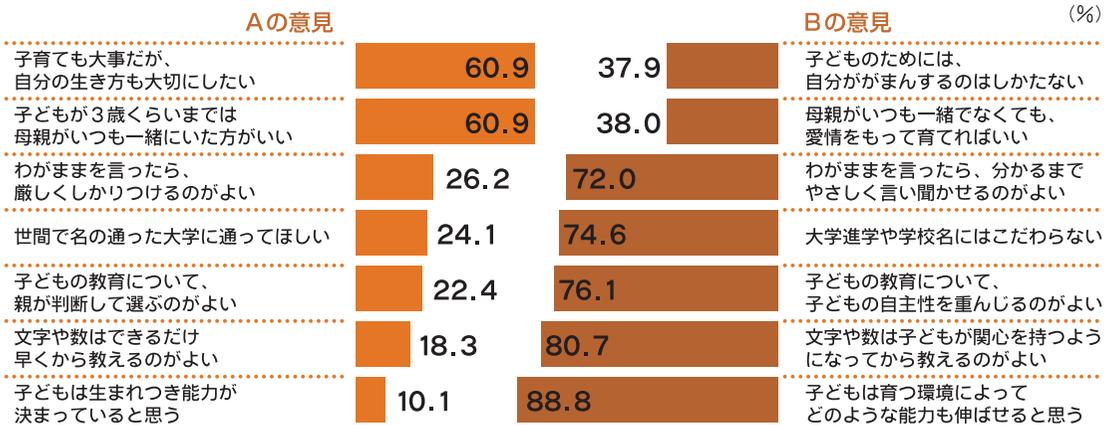
1

6割が「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」

6割の母親は「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考えている。その一方で、「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と答えている母親も6割にのぼる。

Q 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。

図2-1-1 母親の子育て観（05年全体）



※母親の回答のみ分析。
 ※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。
 ※無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。

表2-1-1 母親の子育て観（母親の就業状況別 05年全体）

	常勤者	パートタイム	専業主婦
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	68.9	70.8	57.3
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	31.1	27.5	41.3
A. 子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい	21.3	40.3	70.4
B. 母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればよい	78.7	58.2	28.3

※母親の回答のみ分析。
 ※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。
 ※下線は母親の就業状況別にみたときの最大値を示す。 ※無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。

子育ても自分の生き方も大切にしたいと考えている母親、3歳まで自分の手で子どもを育てたほうがよいと思っている母親はともに6割いる。自分の生き方も子どものことも、両方とも大切にしている母親の姿がうかがえる（図2-1-1）。母親の就業状況別でみると、常勤者やパートタイムは「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という考えを支持している比率が高い。一方、「子どもが3歳くらいまでは母親が

いつも一緒にいた方がいい」は、専業主婦が支持している比率が圧倒的に高い（表2-1-1）。子どもの教育については、「子どもの自主性を重んじるのがよい」「文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい」がともに8割前後で、文字や数の早期教育を肯定しているのはわずか2割弱である。全体としては、子どもの自主性にまかせ、子どもの可能性を信じて見守る姿勢の母親が多いようである。

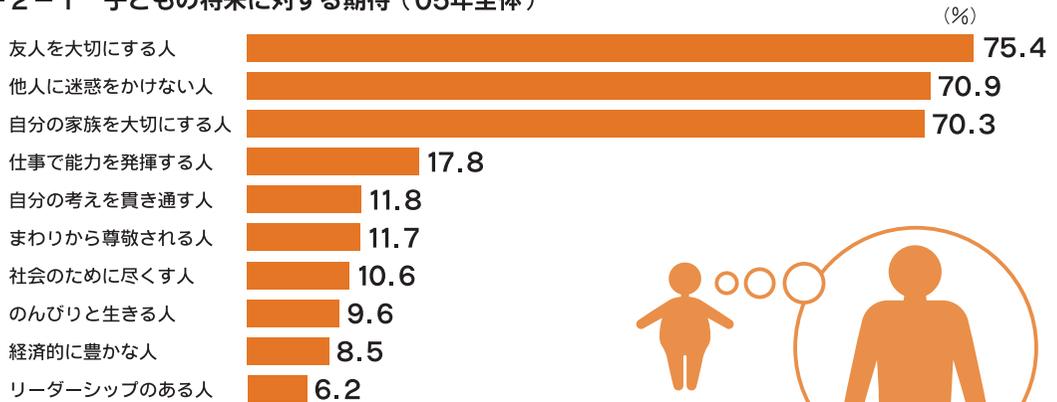
2

多くの母親が社会的な成功よりも人とのかかわりを重視

将来どのような人になってほしいか聞いたところ、「友人を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」「自分の家族を大切にする人」が上位を占め、人間関係を重視していることがわかる。

Q お子様に、将来どのような人になってほしいと思いますか。

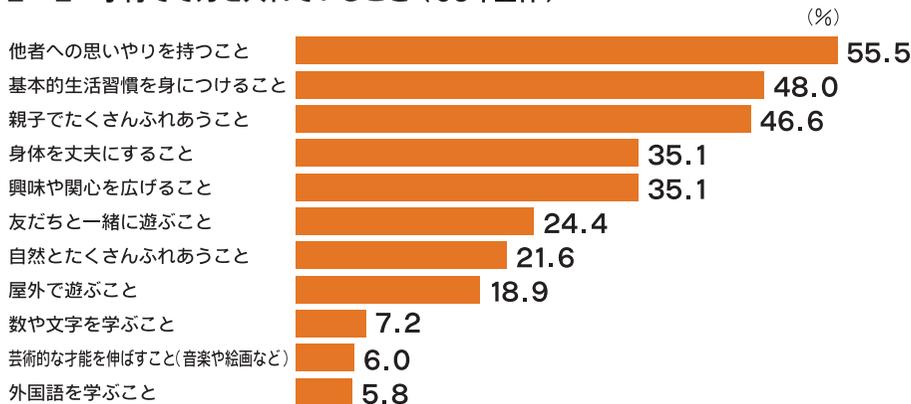
図2-2-1 子どもの将来に対する期待（05年全体）



※10項目中3つまで選択。
※母親の回答のみ分析。
※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子様を育てていますか。

図2-2-2 子育てで力を入れていること（05年全体）



※「とても力を入れている」の%。
※母親の回答のみ分析。
※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。

子どもにどのような人になってほしいか聞いてみると、「仕事で能力を発揮する人」は2割弱、「経済的に豊かな人」「リーダーシップのある人」は1割にも満たなかった。それよりも、友人や家族とのかかわりを大切にする人になることを望む傾向が顕著である（図2-2-1）。また、日々の子育てで力を入れていることをた

ずねたところ、「他者への思いやりを持つこと」に「とても力を入れている」と回答した比率は、55.5%ととっても高かった。その一方で、「数や文字を学ぶこと」「芸術的な才能を伸ばすこと」「外国語を学ぶこと」は1割にも満たなかった（図2-2-2）。多くの母親が、人間関係づくりを重視している。

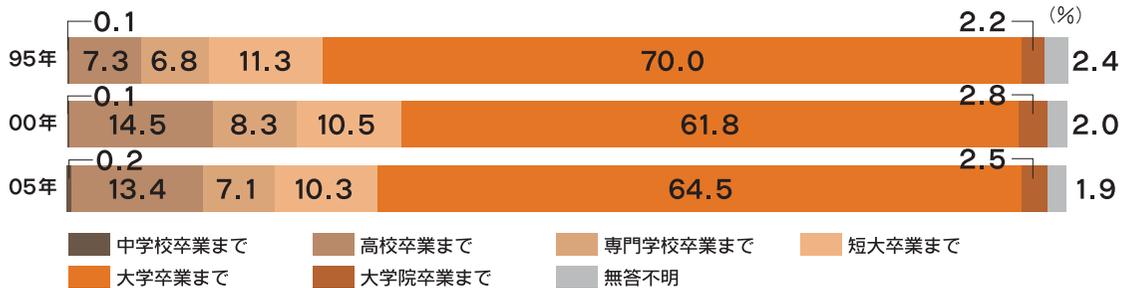
3

母親の3人に2人が子どもに四年制大学への進学を期待

子どもに「大学卒業まで」の学歴を望む母親の比率は00年調査では、61.8%で、95年調査より8.2ポイント下がった。05年調査では、64.5%となり、わずかではあるが比率が回復している。

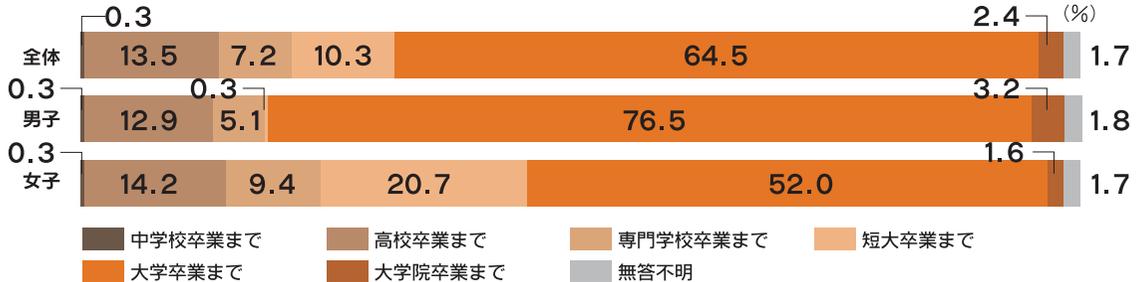
Q 現在、お子様をどの程度まで進学させたいとお考えですか。

図2-3-1 子どもの進学に対する期待（10年比較）



※母親の回答のみ分析。

図2-3-2 子どもの進学に対する期待（全体・子どもの性別 05年全体）



※母親の回答のみ分析。

※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。

図2-3-3 子どもの進学に対する期待（母親の学歴別 05年全体）



※母親の回答のみ分析。

※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもつ母親の回答を含む。

※「高校卒業の母親」は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、「大学卒業の母親」は「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人を表す。

子どもにどの段階までの学歴を期待するかは、子どもの性や母親自身の学歴の違いによって、差が大きい。性別で見ると、「大学卒業まで」を望むのは、男子では7割なのに対して、女子は5割にとどまっている（図2-3-2）。

子どもに「大学卒業まで」を望む比率を母親の学歴別にみると、「大学卒業の母親」は78.1%だが、「高校卒業の母親」だと、51.6%と、26.5ポイントの差が生じている（図2-3-3）。

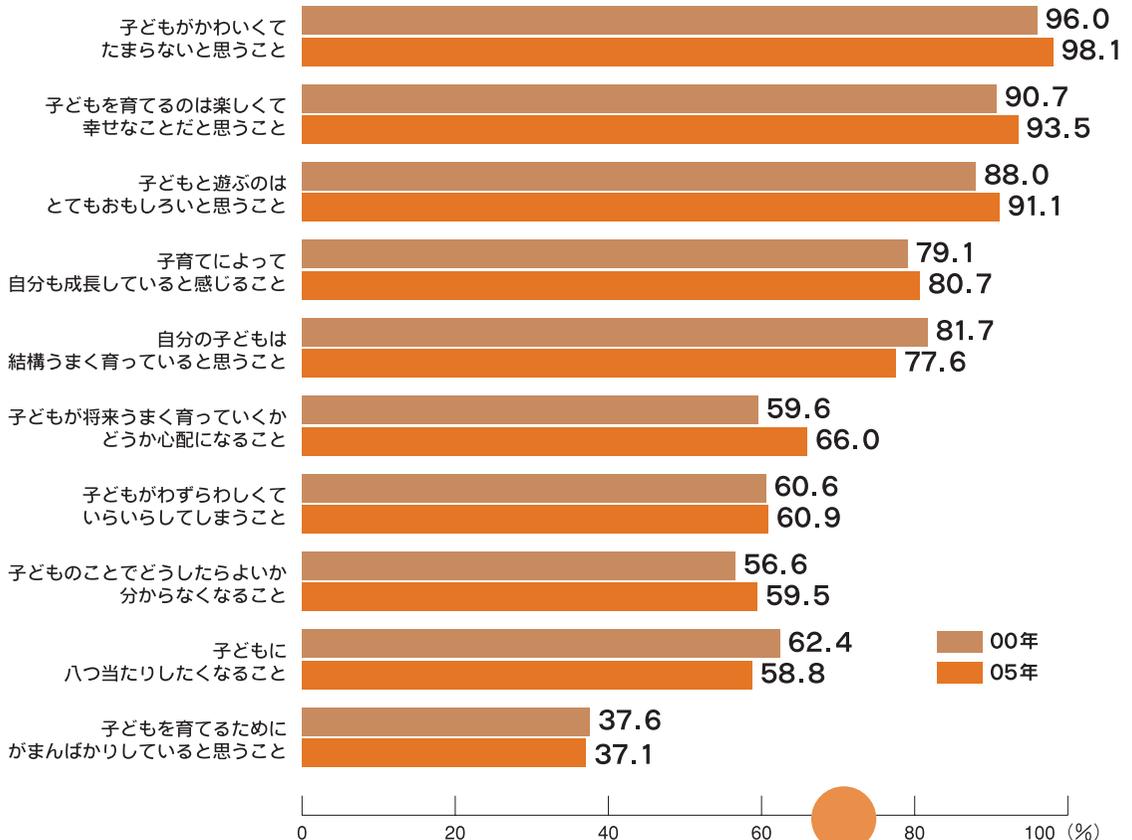
4

子育てへの肯定的な感情が高くなった一方、不安感も高まった

子育てに対しての肯定的な感情は00年調査と比べて、わずかに増えた項目が多い。その一方で、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」という不安は、この5年で6.4ポイント増加している。

Q あなたは、最近次のようなことをお感じになることがありますか。

図2-4-1 母親の子育て意識（5年比較）



※「よくある+ときどきある」の%。
※母親の回答のみ分析。

母親の子育て意識をみると、9割の母親は「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」「子どもを育てるのは楽しくて幸せなこと」がある（よくある+ときどきある）と回答している。しかし、その一方で、6割は「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になる」「子どもがわずらわしくていらいらしてしまう」と感じている。

こうした子育てについての意識を00年と比べると、子育てに対する肯定的な感情が増えている一方で、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になる」という不安も増えている。多くの母親は子育てを楽しくて幸せなこと、成長する機会と感じていると同時に不安感を抱えていることがわかる。

3 父親のかかわり

1

ごみ出し以外、家事・育児への参加は増えていない

家事や育児に対する父親の参加状況を見ると、「ごみを出す」が大きく増えているが、それ以外に大きく増えている項目はない。母親の目からみて父親の家事・育児への参加は、あまり進んでいないようである。

Q 父親は次のことについて、どれくらいしていますか。

図3-1-1 父親の家事・育児への参加状況（5年比較）

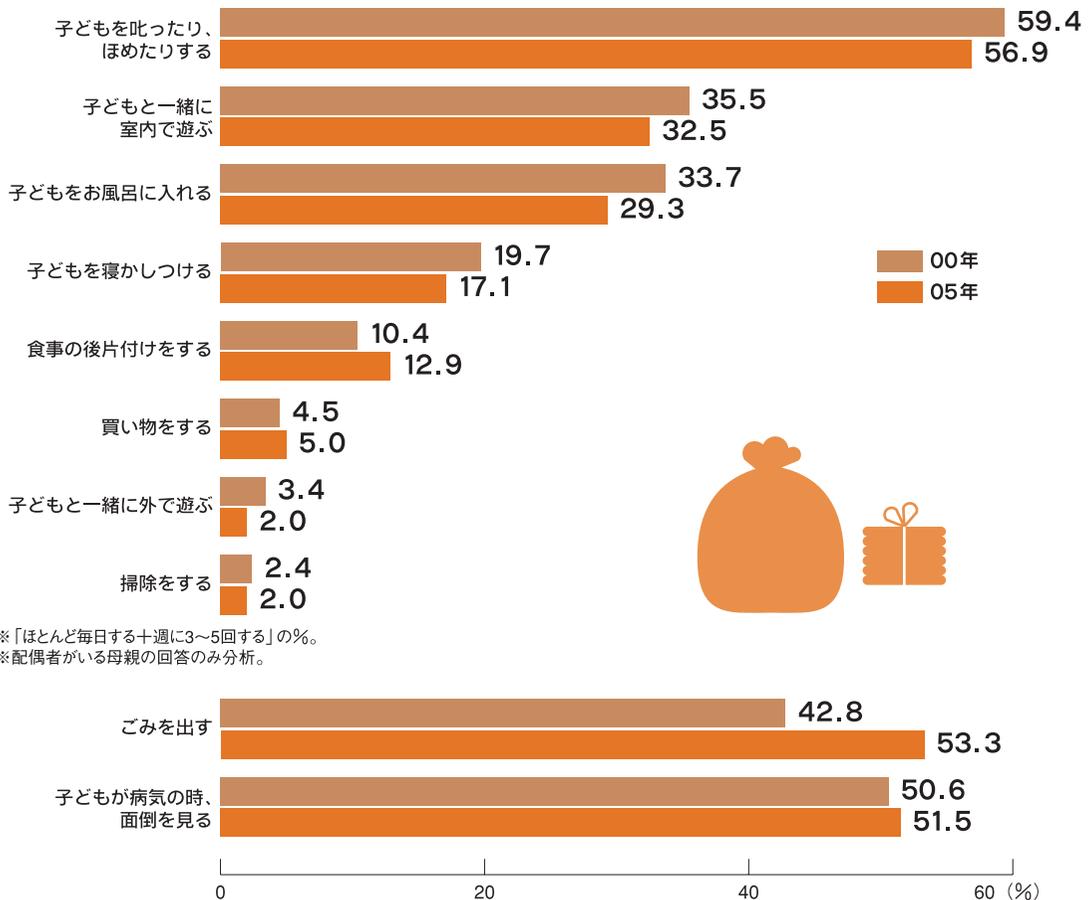


図3-1-1をみると、「子どもを叱ったり、ほめたりする」「子どもと一緒に室内で遊ぶ」「子どもをお風呂に入れる」などの育児への参加状況は5年前と比べて、「する」（ほとんど毎日する十週に3~5回する）比率が若干低くなっている。

家事については、「ごみを出す」に「いつもする」「ときどきする」と回答する比率が増えて、半数を超えたが、それ以外に、大きく増えた項目はない。

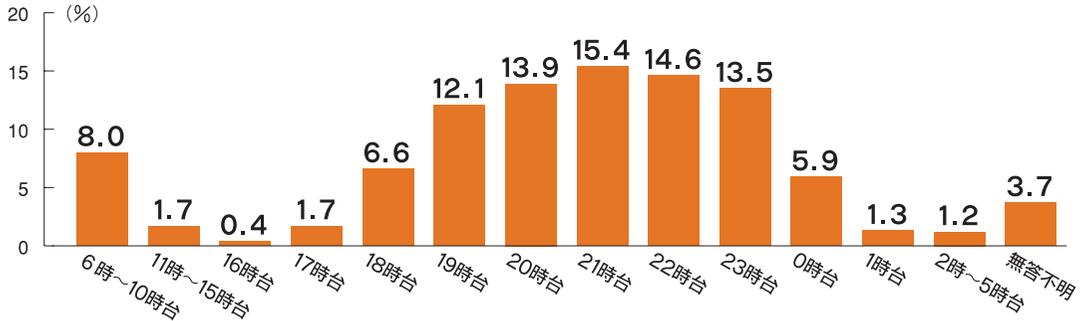
2

帰宅が早い父親は子どもの面倒をよく見ている

父親が帰宅する時刻と育児への参加状況の関係をみると、帰宅が早い父親は育児に参加する比率が高い。

Q 父親は平日、平均して何時頃帰宅しますか。

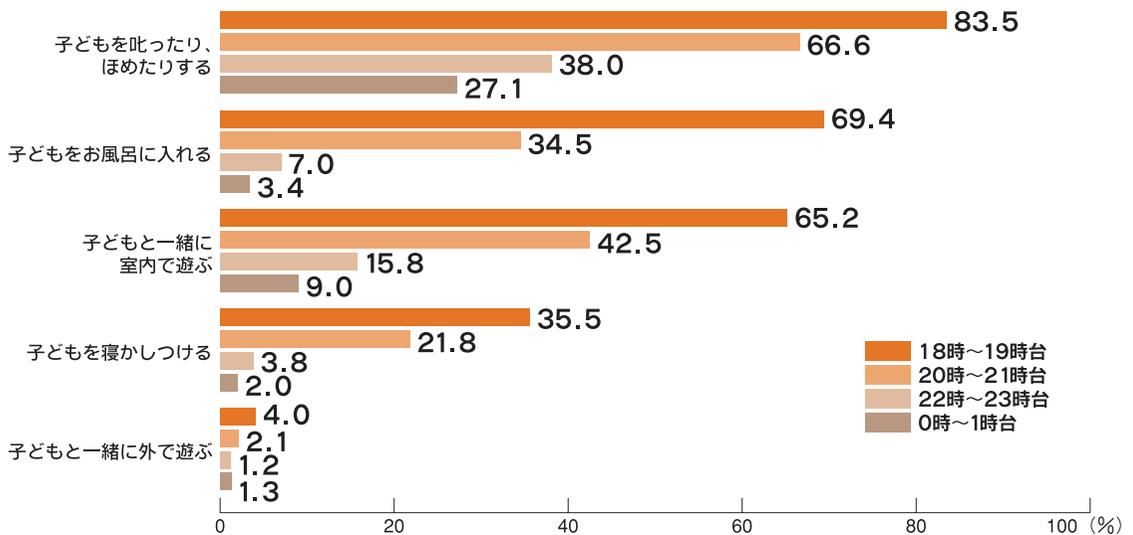
図3-2-1 父親の帰宅時刻（05年全体）



※配偶者がいる母親の回答のみ分析。
※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもち配偶者がいる母親の回答を含む。

Q 父親は次のことについて、どれくらいしていますか。

図3-2-2 父親の育児への参加状況（父親の帰宅時間帯別 05年全体）



※「ほとんど毎日する十週に3～5回する」の%。
※配偶者がいる母親の回答のみを分析。
※0歳6か月～1歳5か月までの乳幼児をもち配偶者がいる母親の回答を含む。
※「18時～19時台」は父親が18時台および19時台に帰宅すると回答した人。

父親の帰宅時刻をみると、19時台～23時台の比率がそれぞれ1割台で推移するなど、帰宅時間帯が分散していることがわかる。17時台～19時台に帰宅する父親が2割いる一方で、22時以降の遅い時間帯に帰宅する割合は3割を超えている（図3-2-1）。

父親の帰宅時間帯と育児への参加状況との関係をみると、早い時間帯に帰宅している父親ほど育児に積極的に参加しており、帰宅時間帯によって、子どもとのかかわりに大きな差が生じている（図3-2-2）。

第3回 幼児の生活アンケート

調査企画・分析メンバー

無藤 隆 (白梅学園大学長)
佐藤 暁子 (新宿区立愛日幼稚園長)
荒牧 美佐子 (お茶の水女子大学大学院博士課程)
木村 治生 (Benesse教育研究開発センター教育調査室長)
邵 勤風 (Benesse教育研究開発センター研究員)
鈴木 尚子 (Benesse教育研究開発センター研究員)
高岡 純子 (Benesse教育研究開発センター研究員)

『第3回幼児の生活アンケート報告書・国内調査』(仮)は
2005年12月に刊行予定です。

本調査の詳細な分析をまとめた『第3回幼児の生活アンケート報告書・国内調査』(仮) (170頁程度、頒価1000円)を、2005年12月に刊行する予定です。この報告書をご希望の方は、添付のアンケートハガキをご利用いただき、希望する冊数をご記入の上、ご投函ください。発刊次第、お送りいたします。なお、この報告書は、書店ではお求めになれません。直接、Benesse教育研究開発センターにお申し込みください。

Benesse教育研究開発センターの調査結果は、WEBサイトでご紹介しています。

Benesse教育研究開発センターで実施している各種調査は、下記のWEBサイトで閲覧することができます。

<http://benesse.jp/berd/>

この速報版でご報告した国内調査と合わせて、東アジア5都市で同様の調査を実施しています!

今回の調査は、一部の調査項目に絞って、北京・上海・台北・ソウルにおいても調査を実施しました。東京を加えた、東アジアの5都市の幼児の生活実態、母親の子育て・教育に対する意識、父親の家事・育児への参加実態などが把握できます。

この東アジア5都市における「幼児の生活アンケート」の結果については、2006年1月に速報版を刊行する予定です。この速報版を1部無料で進呈いたします(2006年3月末日消印有効)。ご希望の方は、添付のアンケートハガキをご利用いただき、必要事項をご記入の上、ご投函ください。発刊次第、お送りいたします。

また詳細な分析をまとめた『幼児の生活アンケート報告書・東アジア調査』(仮)は2006年3月に刊行する予定です。それぞれの国の幼児教育専門家が自国の幼児の生活実態をわかりやすく解説します。

アンケートにご協力ください。

この調査に関するご意見ご感想を、添付のハガキにてお聞かせください。
なお、本調査に関するお問い合わせは、下記までお願いします。

〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター「第3回幼児の生活アンケート」係
受付時間/10:00~17:00(土日、祝日を除く)

『第3回幼児の生活アンケート・国内調査』速報版

発行日:2005年10月12日 発行人:新井健一 編集人:斎藤茉莉子 発行所:(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター

5B004 ●この冊子は、再生紙を使用しています。